

う が さき  
宇 賀 崎 1 号 墳

## 目 次

I 調査に至る経過.....	185
II 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	187
III 調査の方法と経過.....	191
IV 調査の成果.....	192
1. 古墳の形態・規模.....	192
2. 内部主体.....	195
3. 遺物の出土状況.....	196
4. 古墳に伴う遺物.....	199
5. 古墳に伴わない遺物.....	202
V 築造年代について.....	208
VI ま と め.....	211

本文中の「宇賀崎2・3・4号墳実測図」(第2図)は、丹羽茂・森貞喜・小野寺祥一郎・太田昭夫が測量を行ったものである。

## I. 調査に至る経過

宇賀崎古墳群の存在は、昭和46年の東北新幹線建設工事に伴う遺跡の分布調査によって確認されたものである。しかし、その後、この古墳群の存在が地域住民に十分に周知されない間にこの周辺、つまり名取市愛島の松崎地区にある丘陵一帯が開発（土取り）の対象地となり、対象地の中に含まれる宇賀崎1号墳の保存が危ぶまれる事態となった。そこで、宮城県教育委員会としては地権者並びに開発業者に対して名取市教育委員会とともに再三にわたり遺跡の保存を要望した。しかし、本古墳の周辺部まで土取り作業が進み、本古墳の位置する部分のみがビルディングのようになって残存している状態で、隣接する人家に被害の及ぶ危険性が懸念され始めた。したがって、記録保存を図る以外に適切な方法がなく、地権者並びに開発業者に発掘調査に協力を要請したところ、工事を一旦中止し協力する旨の回答を得たので県教育委員会が主体となり、名取市教育委員会の協力を得て、緊急発掘調査を行うこととしたのである。

調査の要項は下記の通りである。

### 調 査 要 項

1. 遺 跡 名：宇賀崎1号墳（宮城県遺跡地名表登録番号12503）
2. 所 在 地：宮城県名取市愛島小豆島字松崎
3. 調査主体者：宮城県教育委員会
4. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護室  
調査員：氏家和典
5. 調査参加者：太田昭夫・高倉敏明・河東田俊一・菅原 了
6. 調査期日：昭和47年4月3日～5月3日
7. 対象面積：約300㎡（実発掘面積約200㎡）
8. 調査協力者：今野 昇氏（地権者）  
高橋幸作氏（三和土建社長）  
名取市教育委員会
8. 遺跡略号：U I



第1圖 宇賀崎古墳群と周辺の地形

## II. 遺跡の位置と周辺の遺跡

宇賀崎1号墳は、名取高愛島小豆島宇松崎に所在し、名取市中心部より、西南約3kmの地点に位置する。

名取市西部には蔵王連峰から東方にのびる標高約200mの高館丘陵地帯がある。この丘陵からは、標高30～50mの丘陵が枝状に分岐し東側に突き出している。箕輪丘陵、野田山丘陵、愛島丘陵（賽ノ窪丘陵）などがそれである。これらの丘陵の東側には、総じて、北の名取川、南の阿武隈川によって発達した沖積地（名取平野）が開けている。

本古墳は愛島丘陵中央より名取平野の南に舌状にのびた台地上に立地し、その先端部に位置する。現在、愛島丘陵の東側一帯は名取ニュータウンとして市街地が形成されているが、本古墳周辺は、市街化調整区域にあたり、いまだに自然村落の景観を残している。本古墳の標高は約14mである。南方の水田との比高差は約8mである。墳頂の一部に、小祠（松崎明神）が建立されており、その周囲は雑木林となっていた。

なお、本古墳の立地する台地の基部やその周辺に、現在まで方墳を含む5基の古墳が確認されており、本古墳を含め、これらは宇賀崎古墳群と呼称されている。

本古墳周辺には、旧石器時代から中世まで、数多くの遺跡が分布しており、県内でも有数の遺跡密集地帯として知られている（宮教委：1976）。このことは、この周辺が名取地方でも、重要な地域として、早くから開発されていたことを推測させるものである。

名取市内には、現在まで、湮滅した古墳をも含め高塚古墳60数基、横穴古墳群4ヶ所が知られている。その多くは、箕輪・野田山・愛島の各丘陵に分布している。ここでは、これらの丘陵に分布する古墳を中心に概観する。

箕輪丘陵には、箕輪A・B古墳群と北野横穴古墳群がある。特に箕輪A古墳群は前方後方墳1基と方墳2基から構成されていて、この丘陵の北西約1.5kmの、丘陵上（標高124m）に立地する前方後方墳の高館山古墳とともに注目されている。野田山丘陵には、その先端に数基の野田山古墳群があった由であるがすでに湮滅している。

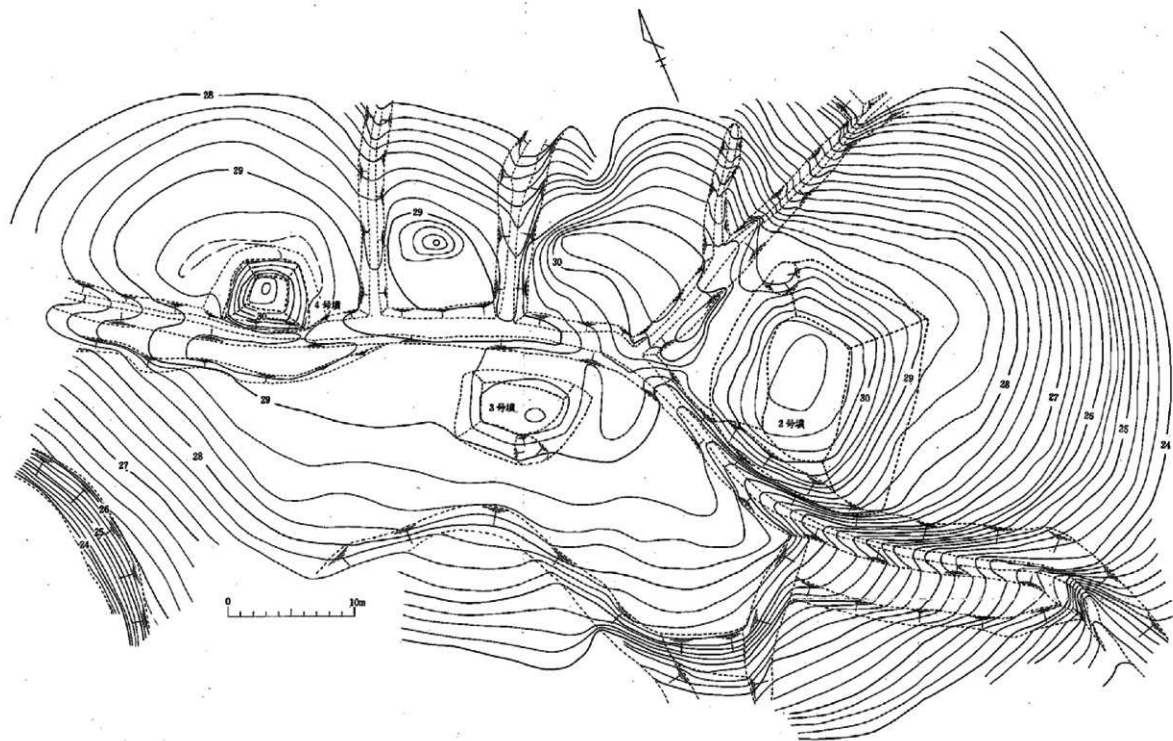
愛島丘陵の基部一帯には、名取大塚山古墳と20数基の賽ノ窪古墳群がある。名取大塚山古墳は主軸が89mの前方後円墳で、外表施設として、埴輪、葺石をもっている。賽ノ窪古墳群は1基の小型前方後円墳と20数基の円墳から成る。そのなかの円墳1基から箱式石棺が発見されている。宇賀崎古墳群は前述したように、本古墳を含め6基確認されている（第1図）。2・3・4号墳は、本古墳から北方約300mの地点に所在する（第2図）。2号墳は、西側の墳丘が山道によって削られ、また裾部の一部に攪乱孔をもつが、比較的保存の良い古墳である。尾根の自然地形を加工・整形して築造されたとみられる方墳である。墳丘はやや不整形な方台状を呈する。

規模は、長辺が残存値で約15.8m、短辺が約15m、高さが約2mを測り、約9m×約4.5mの東西に長い墳頂平坦面をもっている。周湊・埴輪・葺石などは認められない。3号墳は東側の墳丘に山道を作る際の土が盛られている。また、一部の稜線の部分が攪乱されていて変形しているが、残存する部分からみて、方墳と推定される。規模は、長辺が約10m、短辺が残存値で約7.5mで、高さが約80cmと低平である。周湊・埴輪・葺石などは認められない。4号墳は西側の墳丘がわずかに山道によって削られており、2号墳同様、不整形な方台状を呈しているが、方墳と考えられる。規模は、長辺が約4.5m、短辺が残存値で約4m、高さは、約1.4mである。墳丘周囲に、わずかに凹んだ地形が観察されるが、周湊の痕跡かどうかは不明である。埴輪・葺石などは認められない。これらの古墳から、北西約150mに5号墳が、西方約200mに6号墳がある。5号墳は西側が畑地によって削られている。形態は不明である。規模は、略測であるが径約5m、高さは約1mである。6号墳については、以前はかなり大きい墳丘をもっていたと伝えられるが、現在は周囲の畑地によって削られ、2～3mの小墳丘を残すだけにすぎない。形態は不明である。5・6号墳とも周湊・埴輪・葺石などは認められない。

愛鳥丘陵の東側には雷神山古墳を初めとして、大型の古墳が多く分布している。丘陵の南寄りにある雷神山古墳は、主軸168mの前方後円墳で東北地方最大の規模をもつ古墳である。昭和51・52年に行なわれた環境整備のための調査によって、立地や造営方法、壺形埴輪などの出土遺物などに、前期古墳的な要素を含んでいることが明らかにされた（名取市教委：1977・1978）。すぐ北側には、雷神山古墳の陪塚と推定されている小塚古墳がある。形態は円墳で墳径は54mである。これらの古墳の南側には館腰横穴古墳群や小豆島横穴古墳群なども分布している。丘陵の北側には飯野坂前方後方墳群がある。主軸が約60mの古墳4基と主軸が約40mの古墳1基の計5基から成る。埴輪・葺石などは認められてない。すべて未調査のため、詳細は不明であるが、古式古墳の様相を示すものが多いようである。これらの古墳の周辺には、観音塚北古墳や一本杉古墳のように径20m前後の方墳がある。また、湮滅した山開古墳は径20mの円墳で、主体部の横穴式石室から金銅装頭椎大刀などが出土した（小野：1968）。丘陵の最も北側にある箱塚古墳群は3基の円墳からなるが、そのうちの1基からは、埴輪が出土している。

丘陵に分布するこれらの古墳がどのように変遷していったのか、調査例も少なく不明な点が多い。ただ、箕輪丘陵に立地する今熊野遺跡において、方形周溝墓が9基発見されており、古墳の発生の解明に大きな手がかりを与えている。現在このような方形周溝墓から高塚古墳への移行の問題が論議され始めた段階にある。

これらの古墳を経済的に支えてきた人々の集落跡は、近年の調査によって、その数を増してきた。本古墳と同台地上にある松崎遺跡では南小泉式期の堅穴住居跡が2軒検出されている（宮教委：1900）。また、付近からは石製模造品が数点出土している。西向いの宇賀崎貝塚で



第2图 李贺站2·3·4号坑实测图

は、古墳時代中期の竪穴住居が1軒、宮下遺跡では、塩釜式期の竪穴住居跡が8軒、南小泉式期の竪穴住居跡が16軒検出されている（名取市教委：1975）。その他、西野田遺跡では、塩釜式期の竪穴住居跡が11軒、今熊野遺跡では、方形周溝墓と同時期の住居跡（塩釜式期）が3軒と、それに古墳時代後半の竪穴住居跡が6軒検出されている。十三塚遺跡でも多くの竪穴住居跡が確認、または調査された（名取市教委：1977、1978、1979）。これらの遺跡の周辺にも、古墳時代遺物を包含している遺跡が数多く分布している。

### III. 調査の方法と経過

調査は4月3日から開始した。墳丘の西側と北側の一部はすでに崩落（西側は昭和初期らしい）し、小祠の建立されてあった部分は墳丘が削平されていた。はじめに1/100の墳丘実測図を作成し調査区を設定。調査区では、最初に古墳の形態、規模の把握、墳丘の構築面の確認と盛土の状態の把握、内部主体の把握などを目的に墳頂を中心として、東・西・南・北に計4本のトレンチを計画し発掘した。

その結果、墳丘のほぼ中央部より南側に寄って、土師器の埋設土器が発見され、また、地表下約1.5mの深さで、主体部とみられる土壌が確認された。東と南トレンチでは、旧表土と地山を切って落ち込む壇がみられ、墳麓線と考えられた。各トレンチの断面図、および埋設土器の出土状況の実測をすませたあと、さらに調査区を拡張し、主体部の精査と墳麓線の壇のプランの検出を行なった。主体部の土壌は平面形がほぼ長方形となり、その中央に埋葬施設とみられる土壌が発見された。また、墳麓線とみられる壇は墳丘裾に沿って、東と南側でそれぞれ直線的に延びることが確認できた。しかし、南東端では、樹根の攪乱のためそのコーナーを正確に検出することはできなかった。その後、墳麓線とみられる壇と主体部との実測を行なった上、最後に構築方法をみるため主体部を切断了。調査結果を一般に公開するため、4月27日に現地説明会を行ない、後片づけなどを含め、調査は5月3日に終了した。

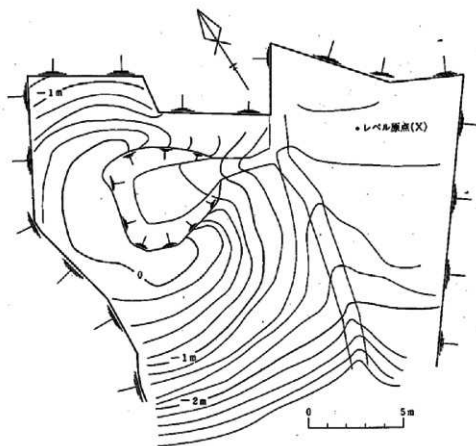


## IV. 調査の成果

### 1. 古墳の形態・規模 (第3・4・5図)

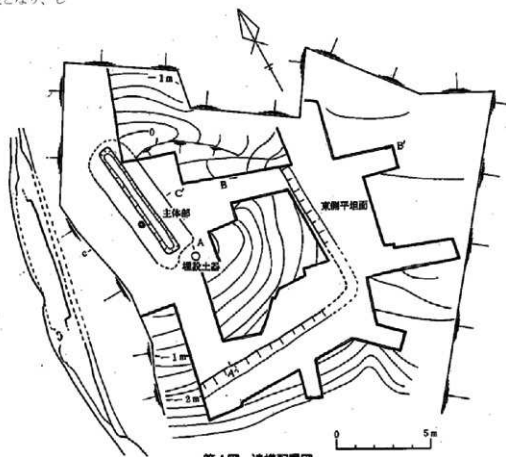
前述したように本古墳は、墳丘の西側と北側の大部分がすでに土取りによって崩落していた。また、墳頂の東側も小祠が建立されていたため、封土のほとんどが削平を受けており、墳丘の南側のみが比較的原形をとどめていた。東側の墳丘裾では山道が造られ、浅く凹んでいたが、その付近が墳麓線と推定されていた。なお、調査前には、西側の崩落した部分の断面で、約1.5mの盛土が観察されている。

調査の結果は、東、南側の墳丘裾部において、旧表土と地山を削り出して意図した墳麓線が確認され、それが方形状を呈して墳丘を取り囲むであろうことが推測されるにいたった。したがって、本古墳は方墳か前方後墳とみてよい。後者とすれば、北側には今回の土取り以前にそれらしい徴証は外観的に認められていないので、昭和初期に崩されたという西側に前方部が

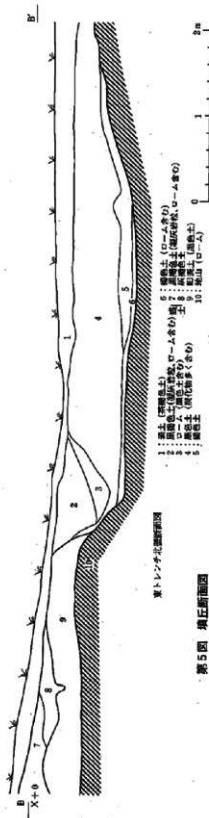
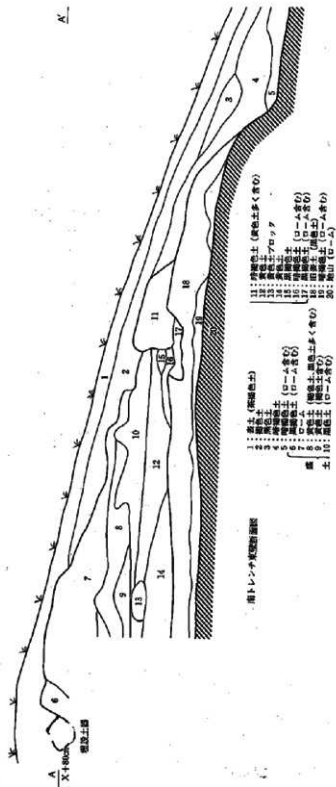


第3図 墳丘実測図

存在したことになる。しかし、仙台平野で現在確認されている前方後方墳は10例、そのうち7例が名取地区に集中しているが、西向きの方墳は1例も存在しない。したがって方墳の可能性が強いとみてよいであろう。方墳として規模を推定すると、墳頂部からの水平距離が、東側の墳麓線まで約8m、南側の墳麓線まで約10mである。主体部が墳丘のほぼ中央にすえられたと仮定すると、墳丘の規模は、それぞれ倍して東西が約16m、南北が約20mということになる。しかし、埋葬主体部は、主体部切断トレンチ壁面（第8図）で観察する限り、西側にも一つあったようで、2基の粘土床のほぼ中間に古墳の中心を置くと、東側墳麓線まで約10mとなり、1辺20mの方墳と考えられよう。なお、東西の両粘土床は、築造方法を異にしており、西側のものは東側のものより古く当初から存在していたことがうかがわれる（第8図）。そして、墳丘中央部の位置を占めていたのは、より古い西側主体部であったと考えると、さらに西にも一つの主体部の存在も想定される。すなわち三つの粘土床のうちの中央粘土床となる可能性もないではなく、そうなると中央粘土床より東側墳麓線まで約11.5m程度となり、し



第4図 遺構配置図



第5図 横丘断面図

たがって南北20m、東西23mの方墳と考えるべきものであろうか。墳丘の高さは、南側墳麓線より測って、約2.9m程度である。

次いで封土の状況について説明しておきたい。地山のローム層上に若干の漸移層をおいて、黒色土が約30cmの厚さで堆積している。この黒色土は旧表土と考えられる。墳丘はこの旧表土の上に盛土をして築かれている。南トレンチでは、旧表土上に約1.7mの盛土が認められた。盛土は、褐色土・暗褐色土・黒褐色土・黄色土などで、大部分は地山のロームを含む層からなっている。これらの盛土の下部はほぼ水平に、上部は墳丘に沿った傾斜で堆積している。東トレンチでは、墳丘裾部分ではあるが、黒褐色土と灰褐色土の盛土がわずかにみとめられた。これら両トレンチとも盛土は墳麓線までは及ばず、盛土と墳麓線の間は旧表土上面となっている。

## 2. 内部主体 (第7・8図)

墳頂下約1.5mにおいて、主軸方向N-7°-Wで、平面形がほぼ長方形を示すとみられる土壌が検出された。大きさは、長辺が約7.5m、短辺が約2.6mである。この土壌のいわゆる遺構確認面は墳頂より約1.1m下であり、これより上方には掘り込みのあとを検出しえない。トレンチ壁面でも検討したのであるが、判別できなかった。土壌内に粘土を充填しそのまま粘土床としている。底面の状況は船底状に凸面を下に向けているが、その最下位部はかつての旧表土と接している(第8図)。粘土床の両端は、そのまま立ち上がりずに内側に傾斜しているので、発掘調査の際、これを意識して壁面の検討を試みたのであるが、両端から垂直に立ち上がる1線も、また両端から外方に向けて水平にのびる1線も識別しえなかった。土壌自体が袋状に掘られたものか、土壌壁の両端が崩れて粘土床の上面にかぶり、同質の黒褐色土層であるために立ち上がり線を識別できないのか、判然としない。したがって、本古墳築造上で設定されたものか、墳丘築成後に土壌を掘り、粘土床を設定したものか不明である。興味深いことは、この粘土床の西側にもう1つの粘土堆積層のあることである。墳丘の西側は昭和初期に崩され、現在崖下に人家が建っているのであるが、その崖面部近くに粘土堆積層がみられる。これは東の粘土床と同質の土で、この辺一帯の地山の土が盛られたものである。おそらくこれが墳丘の中央部を占めるもので、場合によってはこの西にさらに1つ、計3基の粘土床が存在したものかもしれない。

さて、東側の粘土床には、長さ6.5m、幅80cmの小土壌が検出された。粘土床上面で確認された。両端には、こぶし大の河原石が多数つめられていた。第7図の断面にもあらわれているように、本来円筒形と推定できるので、割竹形木棺を埋めたあとと考えてまちがいはない。棺材は殆んど消失していたが、わずかにその遺材と思われる炭化物が認められた程度である。両端にあった河原石は、割竹形木棺の小口部分をうめたものであろう。

なお、この割竹形木棺の西側、やや南寄り部分に、径約40cm、深さ30cmの円形ピットが検出

され、内部には70数個の河原石が詰められていた。その河原石にまじって径1cm余かと思われる琥珀玉が1点、砕けて発見されている。小ピットの遺構確認面は粘土床上面であり、割竹形木棺をはさんで東側の対称的位置には存在しないことといい、その性格は全く不明である。

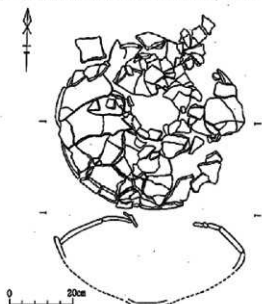
本古墳の内部主体としては、1～3基の割竹形木棺が推定されたのであるが、このほかに、東の割竹形木棺の南側に、壺棺状の土師器が発見されている。口縁部は欠失しているが、のちに述べるように別個体の土師器破片で蓋をしたものようで、これまた小児等の埋葬施設として考えるべきものである。これは墳丘表土より50cm下方に、墳丘築造後、あとからピットを掘って埋設したものである。おそらくは、東の割竹形木棺の時期よりも遅れるものであろう（第6図）。

### 3. 遺物の出土状況

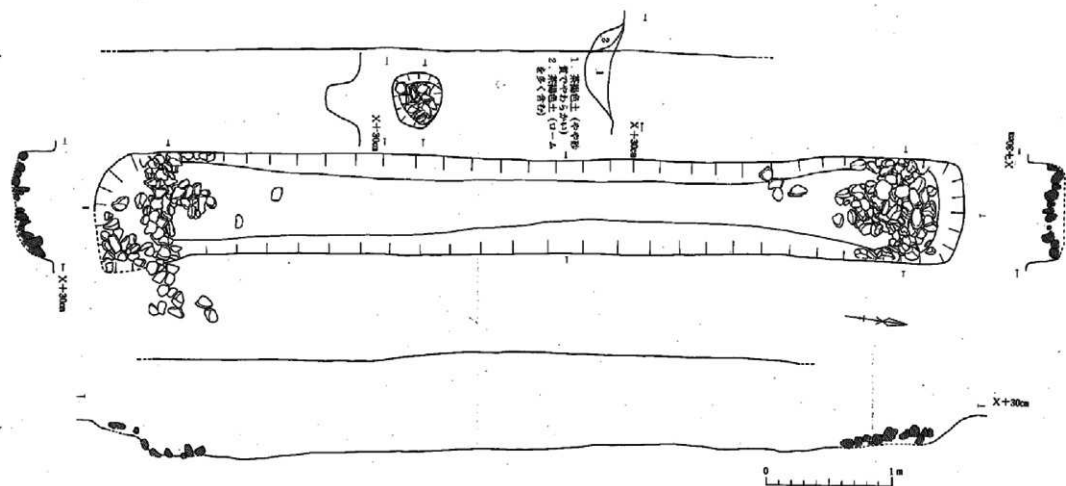
内部主体では、割竹形木棺あたりの小土壕内で堆積土上位から鉄製品2片が出土したのみで、底面出土の遺物は全くみられなかった。この鉄製品は、おそらく棺外から埋まり込んだものと考えられる。小土壕の西側のピット内からは河原石にまじって琥珀玉が1点出土したが、保存が悪く取り上げ時において細片となった。この土壕外の周辺からは、底部穿孔土器、丹塗土器を含む計49点の土師器破片が出土している。

墳頂のやや南寄りの、地表下約50cmのところでは土師器の壺が発見された。主体部上面から約60cmほど高位にある。押しつぶされた状態で、口縁部はすでに欠失していた。底部がその最下位にあることから、ほぼ正位で直立していたものとみられる。また、上面からは別個体とみられる土師器破片がほぼ1個体、ほとんど外面を上して出土しており、上記の壺の蓋であった可能性がある。南トレンチの断面を観察すると、これらの土器の南側のみの観察ではあるが、墳丘最上の盛土が土器の付近で切られており、土器の掘り方と考えられる。その間には地山ロームを多く含む黒褐色土が堆積していた。したがって、これらの土器は、墳丘が一応構築された後、埋設された壺棺と考えられる（第6図）。

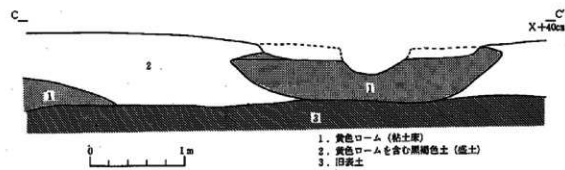
墳丘裾部及び墳丘周辺からは、土師器の破片が多く出土している。南側の墳丘麓の封土内、及び墳丘裾部からは、17点の破片が出土した。東側では墳麓の封土内、及び旧表土上から高坏とみられる破片を含め計34点の破片



第6図 埋設土器(壺)出土状況



第7図 主体部平面図



第8図 主体部断面図

が出土している。また墳の下端から東に広がる平坦面（地山上）からは、およそ南北6m、東西7mの範囲に、坏・壺の破片を含む計270点の破片が散在していた。これらの中には、小ブロック毎のまとまりのあるものも認められた。そのなかには丹塗の土器が24点含まれている。北側の墳麓の封土内からも破片が100点程出土している。

#### 4. 古墳に伴う遺物

本古墳に関係するとみられる遺物には、土師器・鉄製品・琥珀玉がある。ここでは、図示できた遺物を中心に記述したい。

##### 土 師 器

坏（第9図1）墳丘東側の平坦面から出土したものである。1/2程現存している。口径は約6cm、底径はおよそ6cmである。器形は体部から外傾し、口縁部でわずかに内湾するものである。口縁部内外は横ナデの調整が加えられている。体部外面には調整単位はみえるが、ミガキによるものカナデによるものか明らかではない。体部内面と底部の調整は磨滅のため不明である。

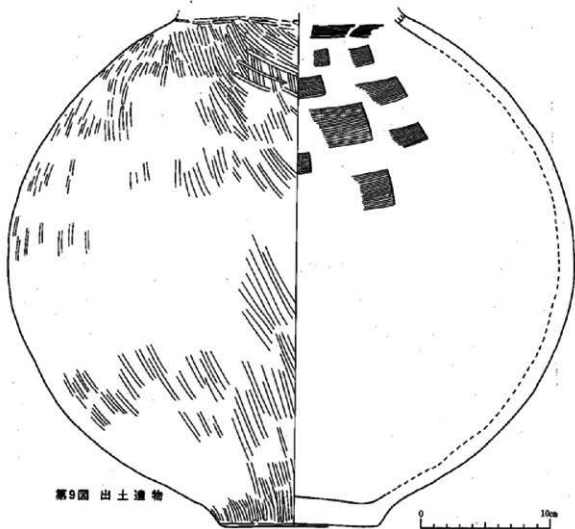
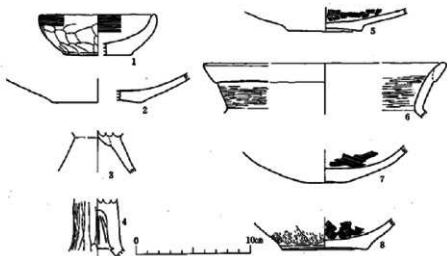
なお、図示できなかったが、その他に外面丹塗の坏破片がある。

高坏（第9図2～4）2は坏部破片で、東側墳麓の封土内から出土したものである。3、4は脚部破片で、ともに墳麓外東側の平坦面から出土したものである。2は甕の底部になる可能性もある。器形は比較的低い角度で外傾する。内外面とも磨滅のため器面調整は不明であるが、外面全体に丹塗りが施されている。3は脚部が大きく開くものである。内面にはナデツケにより、粘土が片方に押しつけられている。内外面とも磨滅のため器面調整は不明である。4は脚部が直立に近いものである。外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリの調整が加えられている。内面には接合痕がみとめられる。

壺（第9図5～9）9は、墳頂地表丁約50cmのところで発見された埋設土器である。口縁部すでに欠失しているが、頸部までの器高は約40cmで、底径は約13cmである。体部は球形をしており、最大径は体部中央にあり、約43cmである。底部はややあげ底である。胎土は比較的緻密で、色調は外面は橙色、内面は灰褐色である。器面調整は、外面では底部から体部全面にかけてはヘラミガキがいていねいに加えられている。接合部とみられる剥落した部分には刷毛目の調整痕がみとめられる。おそらく、刷毛目で一度器面調整した後、最終的にヘラミガキの調整が加えられたものと考えてよからう。内面には、ほぼ全体にヘラナデが加えられている。

5は上記の土器とともに埋設されていたもので、破片点数は多いが復元できたのは、底部付近のみである。あるいは甕になるかもしれないが、一応壺に含めた。胎土は比較的緻密であるが、上記の土器に比して器壁は薄い。色調は、外面は橙色、内面は黄褐色である。器形は体部が低い角度で外傾している。

6と7は東側の墳麓外平坦面から出土したもので、6は口縁部破片、7は底部破片である。



第9圖 出土遺物



6は口縁部が複合口縁であり、輪積技法によって成形されている。器形は、頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部で外傾する。器面調整としては、内外ともヘラミガキがみとめられるが、口縁部上位は不明である。7は丸底ぎみの底部で、外面中央がやや凹んでいる。あるいは甕の底部になるかもしれない。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの調整が加えられている。

8は、南側の墳丘裾部周辺から出土したもので、あるいは甕の底部になるかもしれない。器形は底部からやや低い傾斜で立ち上がる。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの調整が加えられている。

第10図1～3はいわゆる底部穿孔土器で、器形は明らかではないが一応壺に含めた。1、2は主体部周辺から、3は東側の墳籠外平坦部から出土したものである。いずれも焼成前に穿孔を行なっている。内面は刷毛目調整が加えられている。2と3の外表面の一部にも刷毛目がみとめられる。また、2の穿孔部にはヘラケズリの調整痕がみとめられる。

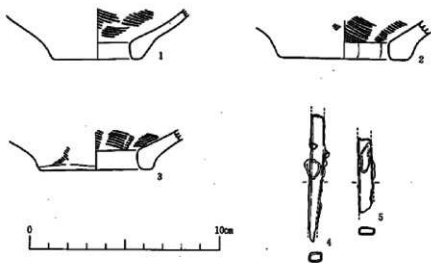
他に、外面にはヘラミガキ後、丹塗りが施され、内面には刷毛目の調整が加えられている体部破片があるが、上部の底部穿孔土器の一部である可能性がある。

#### 鉄製品 (第10図4・5)

ともに割竹形木棺あとの小土壇内の堆積土中から出土したものである。棒状のもので両端が欠損している。4は現存全長6.7cm、幅0.7cmである。5は現存全長3.8cm、幅0.8cmである。断面形は長方形をなしている。これらは、鉄鐮の茎部の一部と考えると良いであろう。

#### 琥珀玉

小土壇の西側のビット内から出土したものである。前述したように、保存が悪いため詳細は不明である。



第10図 出土遺物

## 5. 古墳に伴わない遺物

旧表土・封土および墳丘周辺からは、縄文土器・石器・弥生土器・中世陶器・古銭などが出土している。

### 縄文土器 (第11図1～15)

胎土に植物繊維を含む土器(1～13)と、それを含まない土器(14・15)に分けられる。前者には、文様としてループ文(1)、結束のある羽状縄文(2～9)、結束のない羽状縄文(10・11)、沈線文(12)、竹管文(13)が施されており、前期前半に位置づけられるものである。後者には、縦位の隆帯に角押文が施されるもの(14)と口縁部に沿って二本の隆帯がめぐらされるもの(15)があり、14は中期初頭に、15は中期末に相当すると考えられる。

### 弥生土器 (第11図16～32)

文様、器形から大きく三分される。A類(16～20)はヘラ描きの沈線で平行沈線文を描いている。16～18は同一個体である。B類(21～28)は、平行施文具によって平行沈線文、連弧文、同心円文などを描いている。C類(29～31)は、口縁部が肥厚するか、あるいは複合口縁化しているもので、29は口縁部に交互刺突文と沈線文を施し、30は縦方向の刻目を施し、31は縄文(LR)を地文としたもので、指頭状の圧痕が加えられている。A類は、円田式に、B類は桜井式に相当すると考えられる。また、C類は大きく天王山式に併行するものと考えられる。

32は、甕形土器で、口縁部上端と、体部には付加条縄文(LR+R)が施文されている。

### 時期不明の土器 (第12図1～17)

1～5は地文に斜行縄文(LRが多い)が、6～17は地文に撚糸文(Rが多い)が施文されている。

## 石 器

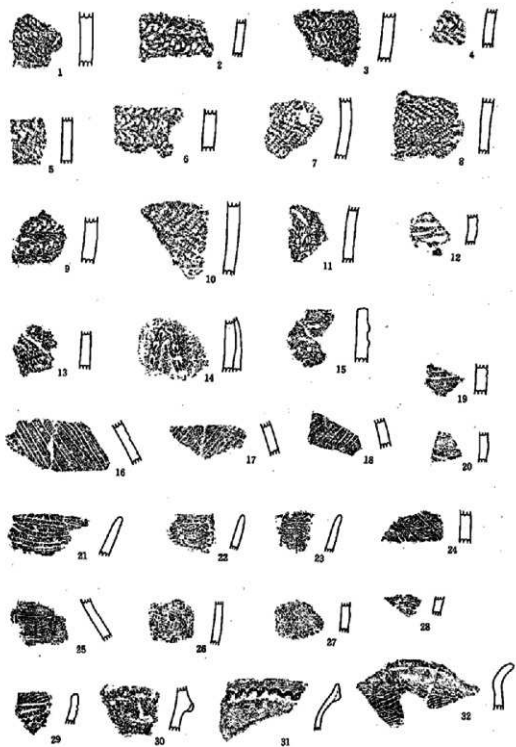
石 鏃 (第13図1～3) : 1はやや片方に反った形態をしている。2は三角形の形態をなし、縁辺にはいかに調整剥離が施されている。3は形態が柳葉形をなす。石鏃としてはやや大形なので、石槍とも考えられる。

石 匙 (第13図4) : 一部は欠損するが形態は石匙に似る。一端につまみ状の突起を作り出し、1側辺に調整剥離を施している。

不定形石器 (第13図5・6) : 5は大形の剥片を用いている。主要剥離面がみとめられるほど全体的に荒い剥離を施している。6は縦長剥片を用いている。1側辺の片側に多くの調整剥離がみとめられる。

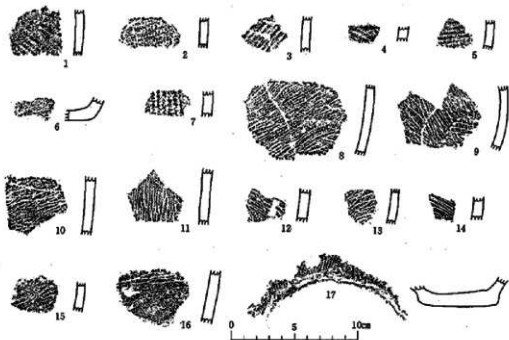
剥 片 (第13図7～19) : 7～13は小形の剥片で、14～19は大形の剥片で、いずれも縦長のものが多い。

磨製石斧 (第14図1) : 全体に敲打による成形痕がみとめられる。刃部は多くの使用のため



第11圖 出土遺物





第12図 出土遺物

か磨耗が著しい。

凹石 (第14図2・3) : 2点とも両面に凹みをもっている。

磨石 (第14図4) : やや扁平な円盤の表裏面、側面全体に磨面を残している。

石庖丁 (第14図7) : 全体の3分1程の破片である。背部は直線的で、刃部は外弯状をなし両刃である。両面とも整形時の擦痕が多くみとめられる。刃部に縦方向の細かな擦痕がみとめられるが、使用痕かもしれない。

玦状耳飾 (第13図20) : 半分欠損するが、平面形は全体に丸みを帯びた長方形をなすものとみられる。断面は扁平である。貫通孔をもつが、補修孔と推定される。

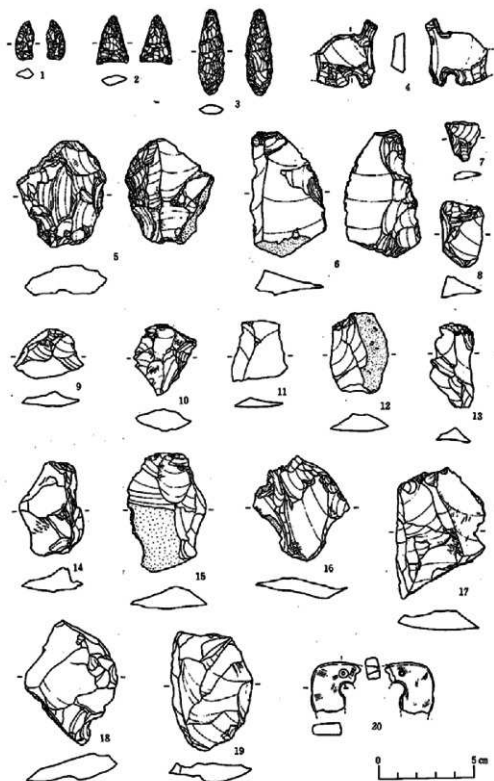
砥石 (第14図5・6) : 2点とも一部が欠損している。5は3面に、6は2面に砥磨面がみられる。

#### 中世陶器 (第14図9)

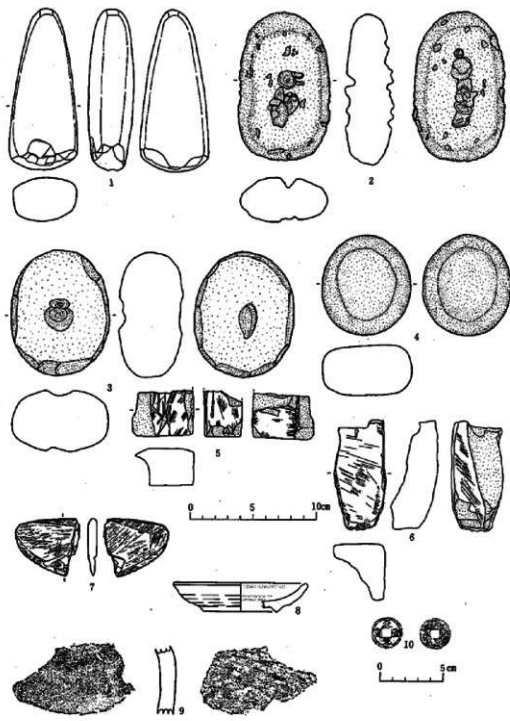
大甕とみられる破片で、内外面ともナデの調整がされている。色調は、外面は褐赤色一部は灰白色で、内面は褐灰色である。

#### 施釉陶器 (第14図8)

高台付の皿である。軸は灰色で、内面には口縁に沿って1条、底部周縁に2条の線が描かれている。その線の色は黒褐色である。志野焼と推定されるが年代は不明である。



第13圖 出土遺物



第14圖 出土遺物

## 古 銭 (第14図10)

種類は「天聖元宝」で、初鋳は1023年(北宋)である。

図版番号	種 類	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材
第13図1	石 鏃	2.1	0.9	0.5	0.8	玉 ず い
◇ 2	◇	2.6	1.6	0.5	1.4	頁 岩
◇ 3	◇	4.5	1.3	0.5	3.6	珉質頁岩
◇ 4	不定形石器	3.7	3.1	0.7	8.4	頁 岩
◇ 5	剥片石器	5.6	4.6	1.7	42.7	珉質頁岩
◇ 6	◇	6.6	3.9	1.2	32.5	細粒凝灰岩(珉化)
◇ 7	剥 片	2.1	1.8	0.6	1.3	黒 曜 石
◇ 8	◇	8.5	2.3	1.1	7.6	玉 ず い
◇ 9	◇	2.5	3.6	0.9	5.5	細粒凝灰岩(珉化)
◇ 10	◇	3.7	3.3	1.2	10.7	黒 曜 石
◇ 11	◇	3.0	2.9	0.5	4.0	石英安山岩
◇ 12	◇	4.3	3.2	1.1	12.1	流 紋 岩
◇ 13	◇	4.5	2.4	0.8	7.0	細粒凝灰岩(珉化)
◇ 14	◇	5.0	3.3	1.2	18.5	細粒凝灰岩(珉化)
◇ 15	◇	6.1	4.1	1.1	21.8	珉質頁岩
◇ 16	◇	5.6	5.0	1.3	20.9	細粒凝灰岩(珉化)
◇ 17	◇	7.3	5.4	1.1	33.8	珉質頁岩
◇ 18	◇	6.6	5.0	1.6	30.5	石英安山岩質細粒凝灰岩
◇ 19	◇	6.2	4.3	1.3	26.2	砂 岩
◇ 20	球状耳飾	2.6	2.5	0.6	6.1	蛇 紋 岩
第14図1	磨製石斧	12.8	5.5	3.5	395.0	石英安山岩
◇ 2	凹 石	11.9	7.2	3.2	395.0	安 山 岩
◇ 3	◇	9.8	7.8	5.1	650.0	安 山 岩
◇ 4	磨 石	7.9	7.1	4.0	370.0	石英安山岩
◇ 5	砥 石	3.4	4.8	2.9	62.0	石英安山岩質細粒凝灰岩
◇ 6	◇	8.4	4.0	4.4	175.5	石英安山岩質細粒凝灰岩
◇ 7	石 包 丁	5.0	4.7	4.7	20.6	頁 岩

石器・剥片計測表

## V. 築造年代について

宇賀崎1号墳は、内部主体として粘土床の上に割竹形木棺を安置する埋葬施設1～3基をもち、1辺20m余、高さ約2m余の規模の方墳と推定される。その築造年代は、決め手となる資料に乏しいので推測の域をでないが、古墳のあり方や出土した壺棺、あるいは他古墳との比較において、本節ではその編年的位置を考えてみたい。

まず宇賀崎1号墳は、近年宮城県各地や山形県米沢盆地で発見されている方形周溝墓とは一線を画するものであって明らかに古墳である。それは、各地で検出された方形周溝墓の内部主体や盛土状況が不明ではあっても、宇賀崎1号墳に周溝の存在しないこと、墳麓線の設定が地山削り出しの方法によって行われていることなどによる。この二点は、東北の丘陵上に立地する中期以前の古墳一般にみられる現象で、雷神山古墳のような発達した前方部をもつ前方後円墳でさえ、企画性ある周溝は存在せず、埴（溝）に当たる部分は、墳丘を築くための盛土を掘りとった跡地を、単に整備したにすぎない（名取市教委：1977・1978）。地山を削り出して墳麓とする築造法も、雷神山古墳や陪塚である小塚古墳で採用されており、三段築成の初段目は、地山であって盛土ではない。これは沖積平野に立地する遠見塚古墳についても指摘できることで、地山ではないが当時の旧表土を削って墳麓線を設定しているから、墳丘では旧表土上面がかなり高く位置している（仙台市教委：1978）。したがって宇賀崎1号墳は方形であっても方形周溝墓の段階にとどまるものではなく、その築造法は古墳と同類と考えてよいであろう。

第二には、長さ6.5m、幅85cmの割竹形木棺の存在が注意されるべきことであろう。東北地方の古墳で発掘調査によって割竹形木棺が検出された事例は極めて少ない。5mをこえるような長大なものは会津大塚山古墳くらいのもので（伊東・伊藤：1964）、仙台市の遠見塚古墳も割竹形木棺を粘土で包みこんだ粘土槨であったらしい。前者は南棺が8.4m、北棺が6.5mとされており、後者も前者の南棺程度の規模になりそうである。前者の場合には棺の両小口につめられた粘土まで入れると若干長くなり北棺で7mと計測できるらしいが、宇賀崎1号墳の全長6.5mという数値はかなり近似するものと云えよう。

東北の古墳には主体部の検出できないものも多いが、その場合、木棺直葬と推定されるにとどまるものがある。それは副葬品が少いことや、粘土床の施設のない古墳にみられる現象のようで、その良き例は、会津盆地の塩川町にある十九塚古墳群中の1、2、3号墳などである（中川他：1973）。この古墳群は、前方後方墳1基と方墳3基の遺存する古墳群であるが、主体部の検出されたのは方墳の4号墳だけであった。それも墳丘部の両端部に、平行して2基の組み合わせ箱式石棺が存在したのみで、中央部にはやや広い空間をもっているにもかかわらず、痕跡を認め難かつたらしい。主墳とみられる前方後方墳の3号墳（全長24m）では、墳丘中央部近



くより土師器や鉄剣が出土しているが、これまた主体部は検出されていない。おそらく1、2、3号墳ともに木棺直葬であり、それも割竹形木棺であった可能性が十分に推測されよう。本古墳群中の各古墳には、会津盆地一般の特性として埴輪の存在しないことはもちろんであるが、墳丘を覆う葺石も存在しないのであって、古式古墳の様相をおびている。報告者は古式土師器の出土によって5世紀前半から中葉にかけての築造と考えられているが、もう少し年代をさかのぼることが十分に可能のようである。また木棺の規模は小さいが、割竹形木棺と推定されているものに、福島県浪江町の加倉3号墳（浪江町教委：1979）や、同県原町市の高見町1号墳（原町市教委：1969）がある。ともに円墳で木棺の長さは前者が2.48m、後者が3.75m、年代判定は難しいが、前者の場合、鹿角製刀装具の付着する鉄刀の出土によって5世紀末ごろと推定されている。割竹形木棺の下限年代としてはこのころであろうか。

仙台平野では、埴輪の状況によって相対年代を推測することのできるものがある。雷神山古墳と古川市青塚古墳は、仙台平野における埴輪出現の最初の古墳と推定される（氏家：1974）が、ここでは埴輪壺のみで他の器形の埴輪を伴わない。次の時期が器形埴輪と円筒埴輪をめぐらせていた名取市経の塚古墳であるが、主体部は長持型石棺であった。これより年代的に後にくる仙台市長町裏町古墳は朝顔型埴輪をまじえる円筒埴輪をめぐらす古墳で、内部主体は、河原石使用の小石室である。どうやら長大な割竹形木棺が古い様式のものであると推定することは仙台平野の場合にも妥当のようで、5世紀初頭と推定されている遠見塚古墳の頃までではなかろうか。このような観点に立てば宇賀崎1号墳も、遠見塚古墳以前と考えることが許されよう。

第三に、宇賀崎1号墳出土の壺棺と周辺出土の土器が参考になる。壺棺が完形をとどめるならば、年代決定の有力資料となるのであるが、遺憾なことには壺棺として使用する時には口縁部をとり除いていたものであるから、型式判定が至難となっている。おそらくこの口縁部には岩出山町座敷乱木出土の壺（氏家：1972）のような、塩釜式タイプの複合口縁が付されていたものではないかと推測されるにとどまる。墳丘外の東側平坦面より出土した土師器は、塩釜式のものでそのなかに底部穿孔土器が含まれているが、今熊野1号方形周溝墓出土のものに近いとみてよいであろう。これらの土器が古墳と直接関係がないとすれば、古墳の成立年代はそれ以後と考えざるをえないが、しかし墳丘築造のために掘りつた地山面に密着した、まとまりをもったその出土状態は、むしろ古墳の祭祀面との関連を示し、用済み後廃棄されたと理解することが可能である。そのような観点に立てば、この古墳の成立年代は、今熊野1号周溝墓とほぼ同時期かそれに近い年代が与えられよう。問題は供献土器とされている底部穿孔の複合口縁をもつ土師壺が、どの位の年代幅をもつかということになる。この種のタイプは、かなり長期に亘って存続しているらしく、雷神山古墳出土埴輪のなかにもその様式をとどめている。

これは塩釜式の土師器が、仮器化されて埴輪のタイプにまで継承発展したことを物語るものであろうが、実はこの雷神山古墳には、埴輪壺に混じて土師壺も立て並べられていたらしい。これが古墳築造前の土師器か、あるいは埴輪壺と同期のものかは確証はないが、接合復元すると完形に近いものがあるのであって、後者の可能性は強いとみられる。類似の傾向は、青塚古墳においても指適できることであって、ここでは墳頂部の埋葬施設の周辺に埋められていたらしい。こういった焼成前からの底部穿孔で複合口縁の土師壺は、両古墳までであってその後完全に消滅するらしい。南小泉式の底部穿孔土師壺はまだ発見されていない。おそらく円筒埴輪へ継承されたものと推定され、円筒埴輪の出現以後は、朝顔形埴輪はあっても、埴輪壺や底部穿孔複合口縁の土師壺は存在しないのである。したがって、底部穿孔土師壺が仮器である以上、その土器が出土したからと云ってこれを直ちに土師器編年の塩釜式期にあてることはできない。遠見塚古墳は粘土柳であるが、この直上から南小泉式の壺が出土したといわれている（伊東：1954）。これが現存しないので、現在の編年観で再確認はできないが、おおよそ妥当な線であろう。宇賀崎1号墳の壺棺が底部穿孔土器でないことは、日常品の転化であるから当然のことで、これが塩釜式土師器であるとすれば、周辺における底部穿孔土器の出土状況から推して、塩釜式期としてもその末期に近いものであろうし、底部穿孔土器が祭器としての用済み後廃棄されたと考える限りにおいて、宇賀崎1号墳の築造年代が青塚古墳や雷神山古墳の築造時期より以前であることは云うまでもなからう。

以上の諸点を総合すると、宇賀崎1号墳の編年の位置は自ら明らかになる。すなわち、今熊野1号方形周溝墓より遅れ、仙台平野における最古の前方後円墳と考えられている遠見塚古墳よりは以前であるから、名取地方に前方後方墳が築造され始めた時期と密接な関係があることになる。これまた仙台平野における最古の大型前方後方墳とみられている高館山古墳が、宇賀崎1号墳の段階を経て出現したのか、あるいはこの古墳の後に宇賀崎1号墳が築造されるに至ったかは明らかにはできないにしても、宇賀崎1号墳が仙台平野での初期古墳としての位置づけを可能としよう。幅85cm、長さ6.5mという長大な割竹形木棺の存在1つをとっても、名取地方における政治的首長の1人と推測するに難くはない。その年代は4世紀末ころに求められようか。

## VI. ま と め

宇賀崎1号墳の調査成果を要約すると次のようになる。

- ①方形周溝墓とは一線を画するもので、台地上につくられた1辺20m余、高さ2m余の方墳である。
- ②墳丘を築くに当っては、周辺の地山を方形に削り出すことによって墳麓線を設定している。
- ③主要内部主体は、1～3基の粘土床を伴う割竹形木棺と推定される。
- ④明らかにできた1基の木棺の規模は、長さ6.5m、幅85cm程度のもので、小口の両端には小石をつめている。
- ⑤壺棺が発見されたが、幼児の埋葬に伴うものと考えられる。
- ⑥副葬品としては鉄片2点のほかみるべきものはなかったが、棺西側の小ピットより琥珀玉1点が出土している。
- ⑦築造年代は、仙台平野における初期古墳として4世紀末頃に求めることが可能である。
- ⑧被葬者としては、名取地方での政治的統一が行われる頃の政治的首長の一人であったと推定される。

以上であるが、宇賀崎1号墳のような方墳は東北地方では数少なく、その分布も地域的に偏在するのが特徴のようで、仙台平野で現在までに確認されているものとしては、名取市の10基と亘理町の1基にすぎない。この方墳と関連の深い前方後方墳は、名取市の7基、亘理町の1基のほか、鳴子町に1基(石の梅古墳)、小牛田町に1基(京銭塚古墳)遺存している(氏家:1974)から、それに伴って方墳もいくつか存在したものであろうが、現存するものはない。おそらくその数は少なかつたものであろう。山形県地方でも山形盆地の東根市に1基(大塚古墳)が知られている(伊藤:1971)程度である。福島県地方では、浜通りと会津盆地に偏在している。浜通りでは原町市や浪江町周辺、会津盆地では会津坂下町や塩川町で発見されている(福島県:19、生江:1976・1977)。

これらはいずれも、東北地方の南半部にのみ存在する古墳時代初期から中期にかけての古墳であるが、その数は前方後円墳や円墳に比して著しく少ない。そこには、当時の東北地方における政治社会の反映が秘められていると理解されるが、その解明は今後の大きな課題であろう。宇賀崎1号墳の調査は、その意味でも、数少ない方墳の発掘事例の1つとして、貴重な資料を提供したことになろう。

## 引用 参考文献

- 宮城県教育委員会 (1976) 「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書第46集』
- 〃 (1974) : 「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ—西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第35集』
- 〃 (1973) : 「金剛寺貝塚、今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書第33集』
- 名取市教育委員会 (1977) : 「昭和51年度史跡雷神山古墳—環境整備のための基礎的調査概報」『名取市文化財調査報告書第3集』
- 〃 (1978) : 「史跡雷神山古墳—昭和52年度発掘調査概報」『名取市文化財調査報告書第5集』
- 小野 力 (1968) : 「宮城県名取市山厩古墳調査報告」『仙台湾周辺の考古学的研究』
- 名取市教育委員会 (1975) : 「宮下遺跡(名取市宮下における古代集落跡の発掘調査概報)」『名取市文化財調査報告書第1集』
- 〃 (1977) : 「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書第2集』
- 〃 (1978) : 「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書第4集』
- 〃 (1979) : 「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書第6集』
- 宮城県教育委員会 (1972) : 「宮城県考古資料展—解説」
- 仙台市教育委員会 (1978) : 「史跡遠見塚古墳—昭和53年度環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書第15集』
- 伊 東 信 雄 (1964) : 「会津大塚山古墳」『会津若松市史別巻1』
- 伊 藤 玄 三
- 中 川 伝 吾
- 中 村 五 郎
- 大川原 栄 喜 (1973) : 「塩川十九塚古墳群調査報告」『福島考古第14号』
- 穴 沢 味 光
- 小 滝 利 意
- 浪江町教育委員会 (1979) : 「加倉古墳群」
- 原町市教育委員会 (1969) : 「原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告」
- 氏 家 和 典 (1974) : 「東北における大型古墳の問題」『東北の考古・歴史論集』
- 〃 (1972) : 「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化第4号』
- 伊 東 信 雄 (1954) : 「遠見塚古墳」『宮城県文化財調査報告書第1集』
- 伊 藤 忍 (1971) : 「山形盆地における発生期古墳の様相」『山形史学研究7』
- 生 江 芳 徳 (1976) : 「会津坂下町の大型古墳」『福島考古第17号』
- 〃 (1977) : 「会津坂下町宇内青津古墳群出崎山支群の測量調査」『福島考古第18号』
- 福 島 県 (1964) : 「考古資料」『福島県史6』

図版 1

1. 古墳遠景  
(西から)



2. 本古墳から  
東方の雷神山  
古墳 (写真経  
緯中央)を見る



3. 墳丘近景  
(南東から)





図版 2

1. 東側埋藏線  
と平埴置の  
状況(南から)



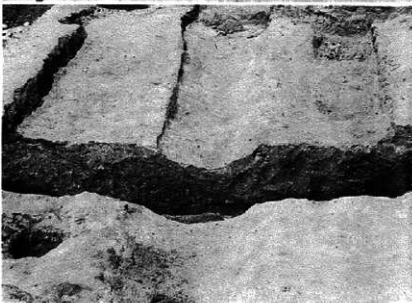
2. 主体部  
(北から)

図版 3

1. 主体部断面  
(南東から)



2. 主体部断面  
(南から)



3. 主体部断面  
(南から)

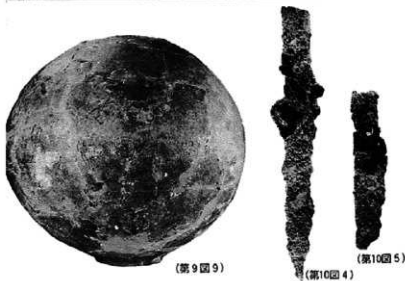
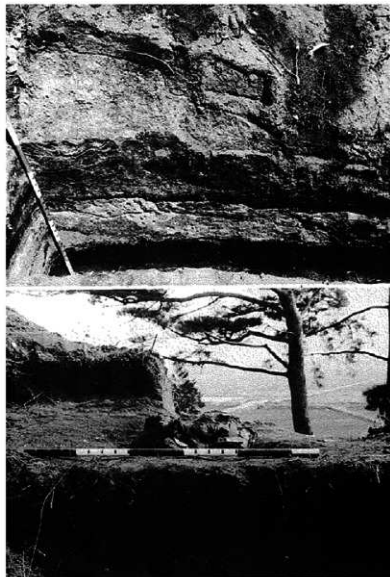


図版 4

1. 墳丘断面一  
南トレンチ  
(西から)

2. 埋設土器  
出土状況  
(北から)

3. 出土遺物  
(縮尺不同)





えびすだ  
恵比須田遺跡出土の土偶

### 調 査 要 項

1. 遺 跡 名：恵比須田遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号38029）
2. 遺跡所在地：宮城県遠田郡田尻町蕪栗字恵比須田34・35・47
3. 調査主体者：宮城県田尻町教育委員会
4. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課  
調査員：丹羽 茂
5. 調査期間：昭和54年6月26日～6月30日
6. 調査協力者：板垣 安雄（土偶所蔵者）

本文中に使用した写真は藤沼邦彦（東北歴史資料館）、千葉英樹（千葉フォット）が撮影した。

## 恵比須田遺跡について

恵比須田遺跡は、遠田郡涌谷町から田尻町を中心として東西に長く伸びた箕岳丘陵の西端付近から、さらに北側に伸びた小丘陵上に立地している。遺跡の北側前面には蕪栗沼とその周辺の沖積地が広がり、背後には加護坊山、箕岳山へと続く低平な丘陵がつながっている。

恵比須田遺跡からは、ここに報告する土偶の他に、縄文時代早期末葉から晩期末葉の遺物が発見されている。また、周辺には中沢目貝塚をはじめ、数多くの遺跡が分布している。

## 土偶について

この土偶は、板垣安雄氏によって昭和18年に発見されたもので、足先きの一部を欠くなどの破損はあるが、ほぼ完成品である。高さ(身長)36cm、肩幅21cmと、大形の中空土偶で、部分的に朱が残存している。頭部には立体的に高く盛りあがった王冠状の突起がある。眼は非常に誇張され、大きく表現されている。鼻は上向き加減で、口は丸く小さい。耳は抽象化されている。首・肩・胴・腰には、浮彫的手法による入組文様が左右対称に展開している。この入組み文様に組み込まれた形で、乳房が具象的に表現されている。ふっくらとした乳房および乳首は、ごく自然な形で内側下方に向いている。ヘソの部分は貫通孔となっている。その下には入組沈線文様があり、周囲に刺突文が施こされている。なお、尻の中央下部には貫通孔がある。

以上のように、この土偶は誇張・具象・抽象などの表現技法を巧みに組合せることによって、整った形態に仕上げられている。一方、身体的特徴、特に乳房の表現などは女性としての姿を十分あらわしている。また、王冠状の突起や身体全体にみられる装飾文様は、縄文時代晩期大洞C1式土器の文様と共通するものであり、同じ時期のものと見て誤りなからう。

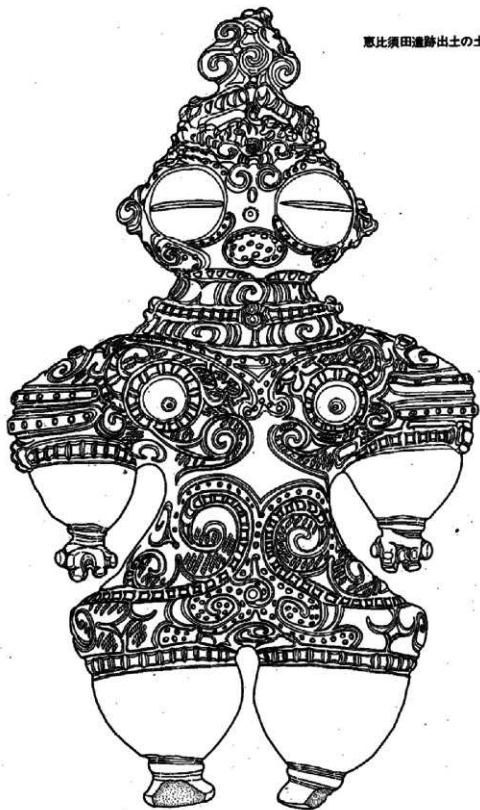
注) この土偶は東北考古学第1輯に口絵として紹介され、簡単な解説が加えられている。

「東北考古学」第1輯・図版I・P.23 東北考古学会：1960.10.

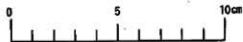
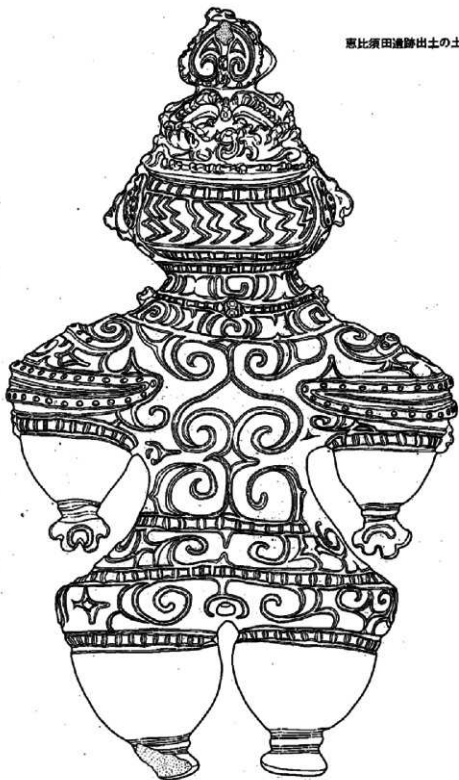


第1図 恵比須田遺跡と周辺の遺跡

恵比須田遺跡出土の土偶



恵比須田遺跡出土の土偶



恵比須田遺跡出土の土偶





昭和54年度

建設 番号	建設名	所在地	調査担当者	調査担当者	原 因	建設の価値
3	内 郷 通 路	小野田町	伊森の6	小野田町教育委員会		住宅地→戦火時代
4	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	阿 部 京 六	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
5	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 亮 一	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
6	金 取 通 路	大野町	伊森の2	宮 城 基 知 幸	土 + 築地区農道工事	住宅地→戦火時代
9	北原町・地蔵堂通路	仙台市	伊森の2	伊 藤 可 長	土地区画整理事業	集落跡→中・近世
11	新 中 通 路	仙台市	伊森の2	佐 + 本 浩	住 宅 建 設	集落跡→住宅・平安時代
13	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 隆 弘	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
14	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 多 利 義	宅 地 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
15	新 倉 崎 通 路	仙台市	伊森の2	高 橋 隆 弘	住 宅 建 設	集落跡→住宅・平安時代
16	沢 乙 通 路	村野町	伊森の6	伊 藤 隆 弘 高橋隆弘 高橋隆弘		
17	蟹 森 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 可 長	土 取 工 事	城跡→中世
18	上宮北原宮前通路跡	鹿嶋町	伊森の2	佐 + 本 京 六	塚 地 造 成	集落跡→戦火・平安時代
19	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	門 脇 敏 吉	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
23	郡 山 通 路	仙台市	伊森の2	佐 + 本 浩	宅 地 造 成	古代官衙跡 (推定)
24	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	中 野 保	電 線 架 設	集落跡→住宅・古墳時代
25	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	二 原 照 夫	解体工事及び住宅地画	集落跡→江戸時代
27	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	高 山 文 男	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
28	小 輪 通 路	仙台市	伊森の1	伊 藤 昭 紀	宅 地 建 設	城跡→中世
29	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 昭 紀	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
31	大崎八幡神社通路	田沢町	伊森の2	高 橋 敏 吉	通 路 工 事	集落跡→城郭跡 (推定) →古墳・平安
32	藤 岡 具 野	気仙沼市	伊森の2	東北地方建設局	一 般 道 路 命 命 改修に伴う工事	集落跡→戦火後
34	小 輪 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 昭 紀		城跡跡
35	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	高 橋 敏 吉	集 落 跡 復 原	鎌 古 塚 跡
36	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	平 野 二 郎	倉 庫 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
37	上 野 通 路	仙台市	伊森の2	飯 塚 巳 代 治 雄	集 落 跡 復 原	集落跡→戦火・平安時代
38	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	仙台市教育委員会	(道 路 の 復 元)	住宅地→戦火時代
40	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	宮 沢 博	住宅地画に併し農道工事	集落跡→住宅・古墳時代
41	山田上ノ倉通路	仙台市	伊森の2	渡 藤 謙 一	宅 地 建 設	集落跡→戦火時代
42	大 陸 山 通 路	鹿嶋町	伊森の2	高 橋 敏 吉	道 路 建 設	住宅地→戦火・平安時代
43	地蔵堂分尾寺跡	仙台市	伊森の2	佐 藤 聖 司	住 宅 建 設	
46	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	宮 城 基 知 幸	古 城 跡 復 原 集落跡復原工事	城跡跡
49	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 多 利 義	住宅地画の基礎工事	集落跡→住宅・古墳時代
50	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	宮 城 基 知 幸	高 橋 敏 吉 伊 藤 昭 紀 伊 藤 昭 紀	
51	新 倉 崎 通 路	仙台市	伊森の2	宮 城 基 知 幸	住 宅 建 設	城跡跡
52	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	仙台市教育委員会	地 画 復 原 工 事 コンクリート舗装工事	集落跡
54	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	佐 藤 二 三 男	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
55	村 野 通 路	村野町	伊森の2	宮 城 基 知 幸	急 傾 斜 地 造成工事	中世城跡跡
56	大 宮 通 路	宮川市	伊森の2	高 橋 文 男	集 落 跡 復 原	集落跡
58	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 昭 紀	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
59	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 昭 紀	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
60	南 小 島 通 路	仙台市	伊森の2	伊 藤 昭 紀	住 宅 建 設	集落跡→住宅・古墳時代
62	南 寺 野 通 路	仙台市	伊森の2	高 橋 敏 吉	宅 地 造 成	古代官衙跡 (推定官衙跡)
64	南 寺 野 通 路 (自通路)	仙台市	伊森の2	宮 城 基 知 幸	道 路 復 原 工 事	住宅地→戦火



郡市番号	施設名	所在地	設置主体等	調査機関等	所 属	施設の種類
66	田道町通所	沼南市	57条の2 柳井 貞 典		自家用倉庫施設	住宅地一帯、奈良・平安
67	穴神高寺通所	龍玉町	57条の3 宮城縣公営企業管理協会		送水管施設工事	県道第一種文庫生時代
68	中屋敷通所	大阿部町	57条の3 大阿部町長		町立保育所施設	駅前地
70	藤山通所	仙台市	57条の2 新 藤 新 一		夜間開放の島の遊歩工事	近代の都市跡?
72	沢田通所	金沢町	57条の3 宮城縣協和会		学校敷地境界の施設	中世紀跡跡 跡
73	仙台城二の丸跡	仙台市	57条の3 東北大学長		取 壊 跡 跡	城跡跡
74	仙台城二の丸跡	仙台市	57条の3 東北大学長		飲料水及び 洗滌水用貯水池	城跡跡
75	市川通所	多賀城市	57条の2 寺 嶋 元 一 郎		保 険 跡 跡	城跡跡
76	東光寺通所	仙台市	57条の2 菅 岡 弘 通		住居跡・倉庫・等 埋 没 の 跡	城跡跡
77	南小島通所	仙台市	57条の2 高 山 武 三 郎		住 宅 跡 跡	県道第一種文庫生時代
78	南小島通所	仙台市	57条の2 高 橋 三 郎		住 宅 跡 跡	城跡跡
79	南小島通所 (南長野二丁目)	仙台市	57条の2 五 十 嵐 天 幸		住 宅 跡 跡	城跡跡
80	南小島通所	仙台市	57条の2 南 川 均		保 険 跡 跡	城跡跡
81	宮沢通所	市川町	57条の2 佐々木 重 一 郎		いもご焼成に係る 製 糖 工 事	城跡跡一帯、平安時代
84	弘川通所	歌津町	57条の6 歌津町教育委員会		住居跡跡工事 (埋 没 の 跡 跡)	住宅地一帯文庫時代
86	御山貝塚	横巻町	57条の2 小野寺 英 幸		資料置場倉庫跡跡	貝塚
88	田尻小字地蔵通所	田尻町	57条の3 田 尻 町 長		保 険 跡 跡	城跡跡
89	瑞穂川左岸河川敷	正木町	57条の3 三 木 幸 町 長		テ ラ ス ト 施設	駅前地
94	中田通所	小牛原町	57条の2 荒 井 順 一		団体置場埋没跡跡	駅前地
96	南小島通所	仙台市	57条の2 寺 沢 順 二		住 宅 跡 跡	城跡跡
98	南小島通所	仙台市	57条の2 藤 田 隆 雄		住 宅 跡 跡	城跡跡
97	高森古通所	石巻町	57条の1 宮 城 町 長		住 宅 跡 跡	跡跡
98	善正寺貝塚	赤山町	57条の3 赤 山 町 長		小 学 校 跡 跡	貝塚
99	南小島通所	仙台市	57条の1 藤 岡 正 夫		住 宅 跡 跡	城跡跡
100	南小島通所	仙台市	57条の1 宮 長 正 夫		住 宅 跡 跡	城跡跡
101	南小島通所	仙台市	57条の1 佐 藤 賢 一		住 宅 跡 跡	城跡跡
102	南小島通所	仙台市	57条の1 村 岡 重		住 宅 跡 跡	城跡跡
103	南小島通所	仙台市	57条の1 林 謙 一		住 宅 跡 跡	城跡跡
104	次瀬原通所	松山町	57条の6 松山町教育委員会		宅 跡 跡	跡跡
105	鹽釜通所	仙台市	57条の1 瀧 典 夫		住 宅 跡 跡	跡跡
107	池ノ中沢田 <sup>A</sup> 通所	高松町	57条の3 高松町仙台工場+高松町 管理 施設		パイプス 跡跡	城跡跡
108	十三塚通所	名取市	57条の3 名 取 市 長		公園整備工事	城跡跡
111	南小島通所	仙台市	57条の3 仙 台 市 長		耐震性の土木構工事	城跡跡
115	市川通所	多賀城市	57条の3 多 賀 城 市 長		道路の拡張改良工事	城跡跡
116	大手門A通所	宮城町	57条の3 宮 城 町 長		道路の拡張改良工事	住宅地
117	南小島通所	仙台市	57条の2 深 田 新 祐		保 険 跡 跡	城跡跡
118	牛小倉通所	仙台市	57条の3 片 桐 弘 子		住 宅 跡 跡	城跡跡
119	南小島通所	仙台市	57条の2 牧 野 幸 雄		住 宅 跡 跡	城跡跡
120	南小島通所	仙台市	57条の2 榎 田 勝 興		住 宅 跡 跡	城跡跡
121	南小島通所	仙台市	57条の2 榎 田 勝 興		住 宅 跡 跡	城跡跡
122	東光通所	仙台市	57条の2 高 橋 空		住 宅 跡 跡	城跡跡
123	南小島通所	仙台市	57条の1 亀 井 川 卓 男		住 宅 跡 跡	城跡跡
124	南小島通所	仙台市	57条の1 堀 橋 貞 一		住 宅 跡 跡	城跡跡
125	神野通所	仙台市	57条の2 庄 子 源 治		住 宅 跡 跡	跡跡

編制 番号	地 区 名	所在地	開 業 日 時	開 業 組 員 名	業 種	通 信 の 種 別	
126	陸奥国分庁通称	仙台市	57年の2	賀 野 勝 志		電 地 通 成	通称
127	群 馬 古 城	古川市	57年の2	丹 野 政 規		群 馬 古 城	地方自治体?
128	八 景 古 城 通 称	大田町	57年の2	大 田 町 勇		通称の弘報伝真工事	通称
129	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	谷 口 裕 子		仙 電 通 成	通称
130	大 南 通 称		57年の2	石 井 圭 計		仙 電 通 成	通称
131	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 市 通 称		自 営 通 信 工 事 通 信 工 事	通称
132	道 前 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 市 通 称		道 前 通 称	通称
133	開 成 通 称	仙台市	57年の2	開 成 通 称		開 成 通 称	通称
134	西 野 通 称	仙台市	57年の2	西 野 通 称		西 野 通 称	通称
135	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
136	宮 城 古 城		57年の2	宮 城 古 城		土 庫 工 事	通称
137	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
138	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
139	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
140	大 代 橋 六 古 城 通 称	多賀城市	57年の2	大 代 橋 六 古 城 通 称		仙 電 通 成	通称六古城
141	大 南 通 称	仙台市	57年の2	大 南 通 称		仙 電 通 成	通称
142	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		仙 電 通 成	通称
143	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
144	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
145	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
146	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
147	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
148	仙 台 古 城	仙台市	57年の2	仙 台 古 城		仙 台 古 城	通称
149	日 立 通 称	仙台市	57年の2	日 立 通 称		日 立 通 称	通称
150	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
151	山 王 新 田 通 称	多賀城市	57年の2	山 王 新 田 通 称		山 王 新 田 通 称	通称
152	八 景 通 称	仙台市	57年の2	八 景 通 称		八 景 通 称	通称
153	多 賀 城 通 称	多賀城市	57年の2	多 賀 城 通 称		多 賀 城 通 称	通称
154	道 前 通 称	仙台市	57年の2	道 前 通 称		道 前 通 称	通称
155	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
156	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
157	伊 達 通 称	仙台市	57年の2	伊 達 通 称		伊 達 通 称	通称
158	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
159	下 郷 通 称	仙台市	57年の2	下 郷 通 称		下 郷 通 称	通称
160	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
161	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
162	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
163	多 賀 城 通 称	多賀城市	57年の2	多 賀 城 通 称		多 賀 城 通 称	通称
164	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
165	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
166	南 小 泉 通 称	仙台市	57年の2	南 小 泉 通 称		南 小 泉 通 称	通称
167	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
168	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
169	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
170	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称
171	仙 台 通 称	仙台市	57年の2	仙 台 通 称		仙 台 通 称	通称

昭和番号	遺跡名	所在地	調査主体等	調査担当等	取 扱 団 体	遺跡の性格	
177	萬金船二の丸跡	巨野町	57条の2	二階堂文文会		専用住宅跡跡	埋跡
178	越 邊 跡	巨野町	57条の3	古城委員会企画運営部		水管理施設	宅地跡
179	玄物堀跡	大府町	57条の2	丸 野 藤 房		宅 地 遺 産	埋跡
180	坂倉跡遺跡	白石町	57条の2	城 垣 協 会		宅 地 遺 産	埋跡跡
181	市川堀遺跡	多賀城市	57条の2	多賀城市長		下 水 運 送 跡	埋跡跡
182	山王遺跡	多賀城市	57条の2	成 岡 九 郎		専用住宅跡跡	埋跡跡
183	透谷遺跡	多賀城市	57条の2	透 谷 町 長		通 学 路 跡	埋跡
184	山王遺跡	多賀城市	57条の2	舞 池 藤 兼		通 学 路 跡	埋跡跡
187	輪寺工遺跡	松山市	57条の2	渡 藤 武 夫		専用住宅跡跡	宅地跡
188	輪寺工遺跡	松山市	57条の2	渡 藤 武 夫		専用住宅跡跡	宅地跡
189	郡山遺跡	松山市	57条の2	二 階 堂 武 夫		専用住宅跡跡	埋跡跡?
190	今小島遺跡	松山市	57条の2	菅 部 北		専用住宅跡跡	埋跡
191	今小島遺跡	松山市	57条の2	佐 藤 伊 智 吉		専用住宅跡跡	埋跡
194	今小島遺跡	松山市	57条の2	渡 邊 龍 彦		専用住宅跡跡	埋跡跡
195	輪寺遺跡	松山市	57条の2	藤 井 孝 一		専用住宅跡跡	宅地跡
194	赤 野 丸 跡	石巻町	57条の2	菅 原 実		土 地 改 良	埋跡
195	五輪可遺跡	内野町	57条の2	内野町土地改良区		土 地 改 良	宅地跡
194	菅生遺跡	内野町	57条の2	内野町土地改良区		土 地 改 良	埋跡跡
197	百 選 町 遺 跡	百 選 町	57条の2	新 泉 守 夫		専用住宅跡跡	宅地跡
198	新 田 遺 跡	多賀城市	57条の2	佐 藤 忠 吉		専用住宅跡跡	埋跡跡
199	新 田 遺 跡	多賀城市	57条の2	木 川 昌 十 三 郎		専用住宅跡跡	埋跡跡
200	芝 野 跡	巨野町	57条の3	宮 城 崇 知 孝		急 造 創 造 地 盤 対 策 跡	埋跡
201	七 尾 堀 跡	河北町	57条の3	宮 城 崇 知 孝		通 学 路 跡	埋跡
202	中 屋 敷 遺 跡	大河津町	57条の3	守 屋 新 三 郎 守 屋 平 行 子		専用住宅跡跡	埋跡跡?
204	新 小 島 遺 跡	松山市	57条の2	堀 谷 節 雄		事務所跡工事	埋跡跡

(3) 文化財保護法第57条の6による届出(遺跡の発見)

昭和59年度

昭和番号	遺跡名	所在地	調査主体等	調査担当等	取 扱 団 体	遺跡の性格
122	打 越 遺 跡	大河津町	57条の6	大河津町教育委員会		
123	川内近世埋跡	松山市	57条の6	東北大学員	海外研修プログラム取組に伴う遺水管理取組	沖野跡一埋跡
127	日 向 東 跡	山元町	57条の6	山元町教育委員会		

(4) 文化財保護法第98条の2による届出

昭和59年度

昭和番号	遺跡名	所在地	調査主体等	調査担当等	取 扱 団 体	遺跡の性格	埋没理由
123	平野山跡貝塚	巨野町	98条の2	巨野町教育委員会	巨野町文化財保護委員会 水 野 敏 郎	60明治工事業跡調査(50-1007取組)	貝塚
126	野 野 堀 跡	豊南町	98条の2	南河町教育委員会	宮 城 崇 知 孝 文化財保護課	小幡埋没跡調査(50-101の取組)	埋跡—小堀
140	藤 原 西 遺 跡	透谷町	58条の2	透谷町教育委員会	宮 城 崇 知 孝 文化財保護課	湯川改修工事取組	中世埋跡跡
141	藤 原 遺 跡	多賀城市	58条の2	多賀城市政府参事会	宮 城 崇 知 孝 文化財保護課	宅地造成取組	包含地—埋跡
150	赤 野 遺 跡	石巻町	58条の2	石巻町教育委員会	宮 城 崇 知 孝 文化財保護課	埋没跡調査取組(53-106の取組)	埋跡跡—庭庫・平安
155	百 選 山 遺 跡	百 選 町	58条の2	百 選 町 教 育 委 員 会	宮 城 崇 知 孝 文化財保護課	小学校建設取組	埋跡跡—縄文時代 埋跡—小堀

昭和54年度

昭和番号	遺跡名	所在地	調査主体等	調査担当等	取 扱 団 体	遺跡の性格
1	日 向 東 跡	山元町	98条の2	山元町教育委員会	志 岡 肇 治	50明治工事業跡調査(50-1007取組)
3	越 邊 跡	巨野町	98条の2	巨野町教育委員会	巨野町教育委員会	平成建設に伴う事業調査 取 組

登録番号	通称名	所在地	調査主体	調査対象	原 因	通称の由来	関連項目	
7	熊 谷 武 進 郎	熊谷市	熊谷市の1	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	熊谷町バイパスに 係る事業計画	熊谷町	54年度 33
8	熊 谷 武 進 郎	熊谷市	熊谷市の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 事業計画	熊谷町→古沢→中込	
10	熊山・土師武進郎	角田市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	幹線中環状道路 事業計画	包含地→古沢・早足	
13	五 井 A 進 郎	丸森町	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 事業計画	熊谷町→古沢→早足時代	
20	藤 本 I 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 社会教育課	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	
21	五 井 武 進 郎 熊野・内野進郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 社会教育課	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	
22	山 口 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 社会教育課	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	仙台市地下鉄延伸 に係る事業計画	
28	宮 口 進 郎	仙台市	熊谷の2	宮城県教育委員会	多賀城跡調査研究所	宇 府 調査	特別史跡・国府跡	
30	城 島 進 郎	中継町	熊谷の2	中継町教育委員会	中継町教育委員会	国 道 5 号 沿 道 の 埋 蔵 物 調査	古代城跡跡	
33	宮 林 進 郎	丸森町	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 事業計画	古代城跡	
39	上 野 進 郎	仙台市	熊谷の2	熊 谷 邑 代 持	仙台市教育委員会		熊谷町→福文・張島、 早足時代	54年度 37
43	大 塚 山 進 郎	熊谷町	熊谷の2	熊谷町教育委員会	熊谷町教育委員会		包含地→福文・張島、 早足時代	54年度 43
44	五 井 武 進 郎	熊谷市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課		包含地→早足・早足 →早足・早足	
47	櫻 田 進 郎	白石町	熊谷の2	白石町教育委員会	白石町教育委員会		包含地→早足・早足	
48	熊 山 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会		宮野・早足跡もしくは 熊谷跡→早足→早足	
50	野 村 六 次 吉 進 郎 (早足跡)	熊谷市	熊谷の2	熊谷市教育委員会	熊谷市教育委員会	宇 府 調査		
51	熊 山 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	文化財保存課調査	遺跡の掘削調査	宮野・中込跡もしくは 熊谷跡→早足→早足	
53	熊 崎 吉 雄	角田市	熊谷の2	角田市教育委員会	文化財保存課調査	埋 蔵 物 調査	熊谷町	
53	高 畑 孝 典 進 郎	中継町	熊谷の2	高 畑 も と い	多賀城跡調査研究所	地 地 造成 に 伴 う 遺 跡 埋 蔵 物	古代城跡跡	54年度 62
55	多 賀 城 跡 埋 蔵 物 調査	多賀城市	熊谷の2	宮城県教育委員会	多賀城跡調査研究所	宇 府 調査	特別史跡 多賀城跡埋蔵物	
71	中 込 孝 進 郎	大川原町	熊谷の2	大川原町教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 文 化 財 保 護 課	町立保育所建設に伴う 埋蔵物調査	包含地	54年度 64
82	水 入 進 郎	多賀城市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 建設に伴う事業計画	熊谷町→古代	
83	欠・持良進郎	鹿嶋市	熊谷の2	宮 城 県 企 業 局	宮城県教育庁文化財保護課	道 水 管 道 敷 設 に 伴 う 事業計画	熊谷跡	54年度 87
87	七 夕 西 進 郎	丸森町	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 建設に伴う事業計画	熊谷跡	
88	熊 林 進 郎	熊谷市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 建設に伴う事業計画	熊谷跡	
90	藤 本 I 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	区画整理事業に伴う 埋蔵物調査	包含地	
91	熊 山 良 雄	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	宮城県教育庁文化財保護課	町立保育所建設に伴う 埋蔵物調査	熊谷	54年度 88
106	熊ノ木武吉進郎	仙台市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	バイパス建設に伴う 事業計画	熊谷跡	54年度107
108	山 口 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	区画整理事業に伴う 埋蔵物調査	熊谷跡	
130	今 島 進 郎	仙台市	熊谷の2	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	宅 地 造成	熊谷	
132	十 三 華 進 郎	名取市	熊谷の2	名取市教育委員会	名取市教育委員会	公園整備事業に伴う 埋蔵物調査	熊谷跡	54年度108
133	伊 藤 進 郎	多賀城市	熊谷の2	宮城県教育委員会	多賀城跡調査研究所	多賀城関連事業計画	古代城跡跡	
134	中 の 五 進 郎	熊谷市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	国道拡幅改良工事に 伴う事業計画	熊谷跡	
135	水ノ下進郎	仙台市	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	区画整理事業 建設に伴う事業計画	包含地	
144	水 入・南 崎 進 郎	多賀城市	熊谷の2	佐 藤 万		下水道管埋設工 事	熊谷跡	
147	新 開 進 郎	多賀城市	熊谷の2	多賀城市教育委員会		宅 地 に 係 る 埋 蔵 物 の 埋 蔵 物	熊谷跡	
148	山 室 進 郎	多賀城市	熊谷の2	多賀城市教育委員会		宅 地 に 係 る 埋 蔵 物 の 埋 蔵 物	熊谷跡	
149	山 室 進 郎	多賀城市	熊谷の2	多賀城市教育委員会		宅 地 に 係 る 埋 蔵 物 の 埋 蔵 物	熊谷跡	
171	西 野 進 郎	高橋町	熊谷の2	宮城県教育委員会	宮城県教育庁文化財保護課	東北幹線道路 建設に伴う事業計画	熊谷跡	
175	渡 部 眞 理 雄	岩手町	熊谷の2	岩手町教育委員会	岩手町教育委員会	町立第1幼稚園建設	良塚	54年度130
184	吉 岡 進 郎	多賀城市	熊谷の2	多賀城市教育委員会	多賀城市教育委員会	宅 地 造成	熊谷跡	54年度131
185	山 室 進 郎	多賀城市	熊谷の2	多賀城市教育委員会	多賀城市教育委員会	宅 地 造成	熊谷跡	
203	熊 田 進 郎	角田市	熊谷の2	角田市教育委員会	角田市教育委員会	宅 地 造成	包含地	54年度132

## 宮城県文化財調査報告書刊行一覧

刊行年月日	報 告 書 名
1954 (昭和29年3月)	宮城県文化財調査報告書第1集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」
1956 (昭和31年3月)	宮城県文化財調査報告書第2集「茶切谷廃寺跡」
1958 (昭和33年3月)	宮城県文化財調査報告書第3集「高藏寺阿彌陀堂・高藏寺の仏像」
1958 (昭和33年3月)	「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
1962 (昭和37年3月)	「昭和36年度多賀城発掘調査概報」
1963 (昭和38年3月)	「昭和37年度多賀城発掘調査概報」
1964 (昭和39年3月)	「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」
1968 (昭和40年3月)	宮城県文化財調査報告書第8集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 (崎山圓遺跡・藤塚古墳調査概報・田町裏遺跡・和味遺跡・合戦原古墳群)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第9集「宮城県遺跡地名表」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗(民俗資料緊急調査報告)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(宇ノ崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (桐形横穴古墳群・墓の基古墳群・松崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第13集「(新産業都市指定地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (西ノ浜貝塚・三十三間堂)」
1967 (昭和42年12月)	宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報(西ノ浜貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査概報)」
1968 (昭和43年3月)	「蔵王山麓民俗図誌(釜戸ダム水没地区)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道遺跡地名表・湯ノ倉館試掘調査概報)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(長根貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第四次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第21集「蔵王山麓の社会と民俗」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山竊跡群」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (下原田遺跡・二屋敷遺跡・持長地遺跡)」
1971 (昭和46年3月)	宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (白石市・銀田郡村田町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物等状態調査報告書」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書 (地名表・試掘調査概報(白石・高津水地区))」

1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財報告書第28集「宮城県遺跡地名表」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 (白石市・仙台市～大和町地区)」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第32集「山畑築物横穴古墳群発掘調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今能野遺跡調査概報」
1974 (昭和49年3月)	宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ヶ宿の民俗」
1974 (昭和49年3月)	宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ(荒里敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北沢遺跡・西野田遺跡・岩切湯ノ塚遺跡・中ノ釜Ⅰ遺跡)」
1974 (昭和49年3月)	「宮城県の古民家」(宮城県民家緊急調査報告書)
	第37集 欠 番
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第38集「高前遺跡」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北限地帯調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度分)」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島(保存管理計画策定書)」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第49集「清太新西遺跡・船渡前遺跡」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」
1977 (昭和52年10月)	宮城県文化財調査報告書第51集「宮城県民俗分布図」緊急民俗資料分布調査報告書
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第52集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅰ(上深沢遺跡)」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第53集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第54集「湯ノ坪遺跡」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第55集「歴史の道調査結果略報」
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第56集「北沢遺跡」

1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第57集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第58集「はちまき関道遺跡詳細分布調査報告書」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第59集「宇南遺跡」
1979 (昭和54年3月)	宮城県文化財調査報告書第60集「歴史の道調査結果略報」
1979 (昭和54年8月)	宮城県文化財調査報告書第61集「五輪C遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第62集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第63集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第64集「はちまき関道遺跡詳細分布調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第65集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第66集「歴史の道調査報告書」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第67集「金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳他」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第68集「玉造遺跡」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第69集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」
1980 (昭和55年3月)	宮城県文化財調査報告書第70集「金取遺跡」